

# 三脚

編集委員・横田三郎

けておく。カメラ、テープレコーダーのほか、下着のスペアが入っている。吐くのならその中にすればいいと覚悟を決めた。

魚崎のランプの表示が車窓から見えたころ、胸部から腹部にかけて絞り込み、すりこぎで内臓をかき回すような痛みがかけ巡る。脂汗が額にじっとりとしんできた。「これはかぜだけではない。内臓の急性の病気に違いない。それもかなりタチが悪そうだ。この調子では家までもつまい」。気が動転してどこに病院があったかも思い出せない。頭部と腹部の痛みは尋常なものではなかった。

そうだ、途中に神戸支局がある。支局に立ち寄り、救急車を呼んでもらおう。神戸市内には市立神戸中央市民病院という設備もスタッフも超一流の総合病院がある。あそこなら何とかな



さし絵・桶嶋 克己

## まさかの頭痛

で聞いているうち耐え難いほどの頭痛に襲われた時も、頭の中に異変が発生しているとは思わなかった。

顔色のあまりの悪さに気付いたS事業部長が「早退して医者に診てもらえ」とタクシーを呼んでくれたが、帰宅してアスピリンを飲んで一汗かけばすぐに良くなると思安易に考えていた。

タクシーの後部座席に深く沈む。脈拍に合わせてランプまで来たらし起こして。その先はまた教えるから」

車は芦屋市から阪神高速神戸線に入る。目を閉じて眠ろうとしても、頭痛のため眠れない。間欠的に吐き気が襲ってくる。車内を汚すまいと持っていたポストンバッグのファスナーを開

るだろう。支局の通用口にタクシーが止まった時、これで助かったと私はホッとした。料金を払おうとして右手でタクシーの伝票を背広のポケットから出し、料金を記入するため左手でそれを持ち変えようとしてりつ然とした。左手はだらんと垂れ下がって全く動かない。指先は氷のように冷たくなって触覚さえも完全に失われている。運転手さんにチケットを持ってもらって、どうにか金額を書き込んだ。

「手を貸しましょうか」というのを制して自力でタクシーを降り、右手でポストンバッグを掲げ、支局の中によろよろと入って行った。左足に感覚があったかどうかは覚えていない。幸いな支局長はいた。「大変な病気にやられたらしい。救急車を呼んでほしい」。言葉はしどろもどろだった。